

【テーマ】法政大学が地域とともに活性化する 『わくわくほうせい！』

ゼミ代表者（教員） 経済学部・教授 山崎友紀
学生代表者 経済学部・経済学科3年 古谷野真希

A. 活動総括(教員担当)

【本活動の目標】

法政大学多摩キャンパスを、学生、教員、地元住民、地元企業に愛される、魅力あふれるキャンパスとするため、「大学と地域が交流をしながら、子供を育てる場を提供すること」を目標とした。

<問題意識>

多摩キャンパスは都心から遠く、市ヶ谷キャンパスの学部に比べると受験生離れがおきている。在学生や教員にとっても利便性に劣り、多摩キャンパスのさらなる「魅力」の付加が必要とされている。地域からも大学を利用したいとの声がある。

<活動の目的>

在学生が自ら企画を作っていくことで、地域住民たちとの年齢や身分を超えた付き合いができるようになること、自発的に活動をコーディネートできるようになること、仲間と協調し法政大学を愛する心をはぐくむこと、そしてこれからの社会に必要なリーダー格に成長してもらうことなどを目的とした。

<活動の意義>

法政大学の多摩キャンパスにしかない魅力を存分にいかし、大学生が大学の魅力に自信を持って活動できた。学生が地域住民と交流しながら、自らを鍛え成長していくことに意義があった。大学としても地域交流の実績を得られた。



学生が園児たちと実験遊びをしている様子



園児たちから届いた感謝状の数々

【計画に沿った実施内容】

1. 勉強会（事前準備）

理科教育、環境問題について学生同士での勉強会やゼミ合宿での見学会（非電化工房）を実施した。他学部の教授にも積極的に働きかけて、学生自身が勉強した。

2. 「わくわくほうせい！」の企画、立案、計画の遂行（学生にまかせた）、「演習」の時間内、時間外に適宜学生が集まって実施できた。何よりもゼミ学生全員が協力できたこと、さらにイベント時には、ゼミ以外の学生が多く参加できた。

3. 実験教室用の教材開発準備

自然を学ぶことを主体とした実験教材の開発、理科実験教材の開発や実施を試みる事ができた。

4. 広報活動

町田市などの広報誌を利用したり、直接、幼稚園、小学校にも電話相談したり、直接訪問などを学生自らで実施できた。

5. イベントの実施

学生が主体となり、実施したイベントはすべて無事故で成功できた。

6. 反省会の実施

各イベント終了後に反省会を実施し、議事録を作成して、参加者全体で共有できた。これまでの実施記録をアーカイブ化することにも力を注いだ。

7. 評価活動

参加者（企画、運営をした学生、イベント参加者として子供たち、引率者たち）からの意見聴取と、教員による評価を行うことができた。反省内容、評価内容が文書として記録した。

【学生についての評価と今後の展望】

■学生たちのリーダースキル到達度調査

各イベント終了後、教員によって評価をした結果、いずれの学生についても徐々にアップすることがわかった。（3→4→4または3→4→5など）1年間を通じて、驚くほどに各学生がリーダーとしての自覚を持つようになり、大きく成長したと感じる。特に、法政大学の多摩キャンパスを誇りに思い、その良さを十分にイベントを通じて、近隣の子供達、幼稚園スタッフ、小学生、小学校教諭、保護者に伝えることができた。

■学生たちの意識・行動調査（他に地域の活動に参加したかどうかなど）

学生達が主体的に、活動ごとに反省会を実施できた。うまくPDCAサイクルが軌道に乗っていると思われる。

■周辺地域住民のイベント認知度や、参加者による評価

参加者にアンケートを依頼した結果から、「子供」、「大学生」、「幼稚園スタッフ」、「小学生」、「小学校教諭」、「大学教授」などの交流があり、非常に良かったと認識した。大学生側も、年齢や立場を超えて交流できたことによる社会のリーダーとしての自覚が芽生えたとの意識が高くなった。

「法政大学で自然体験や、理科実験をしてみたい。」、「将来、法政大学に通いたい。」などの明るい意見が子供達から得られたことは十分に成果を出している証拠と思われる。

■来年度以降の展望

「わくわくほうせい！」は、本ゼミナールの恒例行事として継続する予定である。年々学生も経験が豊かになり、またゼミナール以外の学生の参加数も増加している。今後も継続することにより、「わくわくほうせい！」が多摩キャンパスの魅力あるポイントとしてより広く認知されることを期待したい。

B. 活動報告書（学生担当）

A. 活動の目的

活動の目的は以下の二つである。

① 子どもたちに自然体験を提供し、自然の中に理科が詰まっていることを体感してもらう。

都市化が進んでいる現在、日常生活で自然と触れ合う機会が減少している。自然の中には理科の要素がふんだんに盛り込まれている。子ども達が実際に自然に触れ、自然のなかにあるもので遊んでもらうことで、楽しく理科の魅力を伝える。

② 大学生と地域住民が世代を超えて対話をする場を創出する。

自然豊かな地域に立地する法政大学多摩キャンパスは、バードウォッチングや、幼稚園生が遠足として利用するなど、地域に開放されたキャンパスである。これを利用し、地域間をつなぐ役割を大学が果たし、大学生と地域住民が世代を超えて交流、協働する場を創出する。

B. 対象者

法政大学多摩キャンパス近郊地域の幼稚園生・保育園生・小学生（町田市相原地区、相模原市城山地区、八王子市寺田地区等）の参加を随時受け付けている。別途、夏休み企画はボランティアセンターとの共同で実施した。

C. 参加した学生について

秋の活動スケジュールと参加スタッフのデータは以下のとおり。

日時	参加者
8月5日	小学生60名、学生スタッフ15名、教員数名
10月18日	園児28名、保育士2名、学生スタッフ24名、教員1名
10月22日	園児25名、保育士3名、学生スタッフ24名、教員1名
10月26日	園児29名、保育士2名、学生スタッフ26名、教員1名
11月13日	児童17名、教員3名、学生スタッフ24名、教員1名

〈山崎ゼミ学生〉

4年生：本多亜由美 市川貴行 糸井亮介 木村友馨 多田壮太 畑山崇

3年生：落合拓海 池迫 古谷野真希 大迫翼 中山 田中大貴

2年生：串崎友祐 鈴木敏輝 永山亮太 荒井大暉（計16名）

〈当日にイベントに参加したスタッフ（ゼミ外学生含む）〉

金田南風 斉藤匠 赤井苑美 柳瀬晴日 細村愛 梅津冴美 天野里歩

永野冴香 豊福琴 渡邊莉加 藤野帆奈美 坂田奈那 金城孟史 淵本麻侑 小川大樹

岡本章宏 平林倫尚 松尾亮 荒川紗季 崔孝住 藤野沙織 飯山琴美 和合谷啓

小林まな 植木 村山 池上真平 小林薫 林幸美 長田富美（計30名）

D. 主要スタッフの役割分担（10月18日、10月22日、10月26日、11月13日）

総責任者・進行：古谷野真希（3年）

タイムキーパー：大迫翼（4年）、小田切マーク洋平（TA）

写真係：中山（3年）、永山亮太（2年）

ウォークラリー担当：落合拓実（3年）

実験教室担当：荒井大暉（2年）

焼き芋担当：田中大貴（3年）、鈴木敏輝（2年）

(10月18日)	(10月22日)	(10月26日)	(11月13日)
金田南風	永野冴香	小川大樹	小林まな
藤原航	藤原航	岡本章宏	植木
斉藤匠	豊福琴	藤原航	金田南風
赤井苑美	渡邊莉加	平林倫尚	村山
柳瀬晴日	藤野帆奈美	松尾亮	池上真平
細村愛	坂田奈那	荒川紗季	小林薫
梅津冴美	金城孟史	崔孝住	林幸美
天野里歩	淵本麻侑	藤野沙織	長田富美
		飯山琴美	
		和合谷啓	

3. 活動内容

活動内容は、イベント当日までに広報や企画準備を行う事前活動、イベント実施日の活動、活動を評価し次回以降の改善を図る事後活動に分かれる。これらの活動すべては学生主体として行われた。イベントの企画内容は、山崎ゼミナールの研究内容が自然環境を対象とすることから、教員の指導により理科、環境、生物多様性、里山などをキーワードとして、四季を通じて地域住民の要望に応じた行事テーマを設定することができる。

2012年度の活動としては、太陽の子幼稚園の年長組園児計82名を3日間、町田市立こうさぎ保育園の園児計17名を1日招き、ウォークラリー、理科実験教室、焼き芋作り・試食を行った。

参加費は無料であり、諸経費は今回の助成金と一部、山崎ゼミナール自身が負担している。

A. 事前活動

■ 広報活動

事前に町田市、八王子市の広報に、イベント情報の掲載を依頼する。さらに近隣小学校、幼稚園（保育園）への案内資料配布も行う。また、外部学生スタッフとして、山崎ゼミナールの所属学生以外にも広く参加者を募った。

（例：「広報まちだ」掲載文）

大学で『自然』と『科学』を体験しよう！

【日時】各団体のご希望にあわせて決定します（平成二十三年九月末～二十四年三月まで）。

【場所】法政大学多摩キャンパス（町田市相原町 4342）

【対象】幼稚園（保育園）児や小学生など。一回につき 20～40 人程度

【内容】法政大学多摩キャンパスにあふれる自然の体験と、年齢に合わせた楽しい理科実験教室（例 入浴剤作り、草木染、プラバン工作、七宝焼、植物採集、太陽電池おもちゃ、化学教室）

【参加費】無料。

【連絡先】法政大学経済学部山崎友紀ゼミナール（FAX 042 - 783 - 2635、またはメール yyuki@hosei.ac.jp、hp <http://www.t.hosei.ac.jp/~yyuki>）まで、ご希望の日時、人数、年齢（学年）、などをご連絡ください。

また、多摩地区（近隣3市）の幼稚園や保育園に、直接案内書や企画書を送付して。2012 年度に郵送した園は次のとおりである。返事のあった園には、リーダーとゼミ長で訪問をしたり電話をして参加しやすいように説明を丁寧に行った。

八王子市

幼稚園名	住所	TEL
白百合幼稚園	”東京都八王子市長房町 7 5	0426-61-0801
なかの幼稚園	”東京都八王子市中野 上町 5 丁目 3 2 - 1 3	0426-22-3001
おさひめ幼稚園	”東京都八王子市下柚木 1 9 8 2 - 1	0426-76-8552
セント・ベル幼稚園	”東京都八王子市並木町 3 3 - 2	0426-61-2619
高尾幼稚園	”東京都八王子市東浅川町 5 1 5 - 5	0426-64-5755
ルンビニ幼稚園	”東京都八王子市山田町 1 6 2 2	0426-64-7805
サンライズ幼稚園	東京都八王子市片倉町 1 2 9 6 - 6	0426-36-0458
元八王子幼稚園	東京都八王子市元八王子町 2 丁目 1 0 1 2 - 3	0426-61-7746
東京音楽学院長沼幼稚園	東京都八王子市長沼町 9 6 0	0426-37-2526

相模原市

幼稚園名	住所	TEL
あかね幼稚園	神奈川県相模原市中央区下九沢 964	042-773-0730

太陽の子幼稚園 神奈川県相模原市緑区原宿南 3-6-10 042-782-6332
小山白ゆり幼稚園 神奈川県相模原市宮下本町 3 丁目 4-12 042-773-8241

町田市

幼稚園名 住所 TELL
町田すみれ幼稚園 東京都町田市小山町 4365-1 042-773-1151
子どもの森幼稚園 東京都町田市常盤町 303 042-797-7631

保育園名 住所 TELL
町田市立こうさぎ保育園 東京都町田市相原町 792 042-772-3034

■事前ミーティング、準備

活動の意義と企画内容について学生たちの理解を深めるため、事前ミーティングにおいてディスカッション、リハーサルを行う。また当日のシフト表、実験の手順、全体の流れなどが記載されている資料（写真）を制作し、当日スタッフに事前に配布した。実験教室における備品の準備や管理についてもすべて学生が行った。



〈写真〉配布資料

B. 当日の活動：イベント実施内容

〈町田市立こうさぎ保育園〉

イベント所要時間は約 3 時間で、キャンパス・ウォークラリー、理科実験教室の 2 つのイベントから構成されている。

■キャンパス・ウォークラリー（所要時間：約 20 分）

大学内にあるハイキングコースを歩きながら、目にする生き物や植物に関するインストラクションやクイズを行い、子どもたちに自然を肌で感じ、楽しみながら考える機会を提供する。自然を体験することで初めて生まれてくる「空はどうして青いのか?」、「葉っぱはなぜ緑色なのか?」などといった疑問を抱いてもらい、これを子どもたちの理科する（科学する）心の芽生えにつなげる。

〈写真 1〉 キャンパス・ウォークラリーの様子

〈写真 2〉 自然道での木の観察



■実験教室（所要時間：約 30 分）

身近に触れられる科学の不思議さや、実験の面白さを知ってもらうことが狙いである。学生スタッフが焼き芋を調理する時間を子どもたちの実験教室に充てる。また、雨天時には、屋内で実施する実験教室の内容を拡大させる。

【実験例】

- 『冷却パック』
水と尿素の合成によって温度を下げる。
- 『炎色反応』
様々な物質を燃やしてみてどんな色の炎か確認する。

〈写真 3〉冷却パック

〈写 4〉 炎色反応



〈こうさぎ保育園〉

イベント所要時間は約 4 時間で、ウォークラリー、理科実験教室の 2 つのイベントから構成されている。

■実験教室（所要時間：約 1 時間分）

いくつかの実験を園児にローテーションしてもらいながら、体験してもらった。また、雨天時には、屋内で実施する実験教室の内容を拡大させる。

【実験例】

- 『磁石の実験』
砂鉄を磁石で動かす実験。
- 『油マジック』
油の入ったビーカーの中にもう 1 つビーカーを入れると見えなくなるという実験

〈写真5〉磁石の実験



〈写真6〉油マジック



また、8月5日のサマーキャンプでは、福島県、八王子市、日野市などの小学生合計60名について30名×2クール（9:00～と10:00～）で実施した。

実験テーマは下記のとおりである。

- ・炎色反応
- ・顕微鏡観察
- ・感光感熱紙を使った実験
- ・表面張力の実験
- ・冷却パックづくり

C. 事後活動

■スタッフ事後ミーティング：各回後に学生スタッフによるミーティングを実施

■対象幼稚園へのアンケート調査：幼稚園教員を対象とする評価アンケート

園児を対象とする評価アンケート

保護者を対象とする評価アンケート

■対象幼稚園へのヒアリング調査：幼稚園教員とのミーティングにより、子どもたちへの教育効果や企画の改善案を検討

■成果報告

成果報告として下記の機会で行った。

- ・市ヶ谷キャンパスでのLU基金採択ゼミ合同中間報告会での発表
- ・報告書作成：実施に至るまでの準備工程や実施内容、成果、課題を報告書に記載
- ・経済学部環境系ゼミ合同発表会：環境系ゼミグループ内における研究成果発表
- ・卒業論文の作成

4. 企画の質を向上させるためのプロセス

イベントの質と教育効果を向上させるために、運営プロセスにPDCAサイクル（図9参照）を用いている。イベント実施後には、学生スタッフによる事後ミーティングを行い、企画実行に伴って発生した課題を洗い出し、対策方法を検討しながら現場で得られた知識の共有化を図る。また学生スタッフは、イベント実施毎に課題と改善点をレポート提出する。次回のイベント前には事

前ミーティングを行い、改善案を導入し、プラン修正をした上で、企画準備に移る。また、対象幼稚園教員へのアンケート調査とヒアリング調査により、企画内容の顧客満足度や子どもたちへの教育効果を確認し、調査結果を次回以降のイベントに反映させる仕組みである。



〈図〉 わくわくほうせい！のオペレーションサイクル

5. 活動の評価

幼稚園教員へのアンケートとヒアリングからは、満足いただけたという回答を多くいただくことができた。その一方で実験教室における理科教育とのつながりが欠如していた、との意見も頂いた。また、昨年度は幼稚園職員だけにアンケートを行ったため、園児たち自身の理解度が不透明だった。そのため今年度は園児、保護者にもアンケートを実施し、より理解度、満足度、不満点などの意見を得ることができた。

本活動が提供する教育サービスの特徴としては、①幼稚園児や小学生が、大学教員による科学・理科の専門的な教育サービスを受けられること、②幼稚園と大学のコラボレーション（協働）であること、③大学のキャンパスそのものを教材にしていることがあげられる。

一つ目の大学教員による専門的な教育サービスについては、小学校の教員らに理科教育の指導スキル不足が蔓延するなかで、子どもたちがふだんの幼稚園や学校内では得られない理科の体験と、それを理解するための正確でわかりやすいインストラクションを受けられることが、参加者にとっての満足につながっている。また、自然現象についての因果関係をわかりやすく子どもたちに伝える過程を通して、参加する幼稚園の教員にとっても科学的な思考を促す効果があり、彼らの指導力を補強する働きもみられた。

二つ目の特徴にあげた、幼稚園と大学のコラボレーションは希少性が高く、特に理科教育をテーマにした企画については他に例がない。夏休み期間中には、多くの大学がそれぞれの専門性を生かして、小・中学生、または高校生向けの企画や講座を行っているが、「わくわくほうせい！」のように幼稚園児をも対象としながら、開催時期を限らずに顧客の要望に応じて随時開催する企画事業は存在しない。また、大学教授や大学生と交流することは、幼稚園児にとって大学に対す

る第一印象を形作る重要な機会となる。子どもたちは「わくわくほうせい！」を通して、大学という場と、大学教授や大学生という属性を持つ者たちにまつわるイメージを形成してゆき、それは成人した後まで影響を与えるであろう。

三つ目の大学のキャンパスを教材にしていることについては、地域資源を有効活用することのみならず、地域に開かれたより親しみやすい学びの場としての大学を、子どもたちと幼稚園や学校の教員らにアピールする効果がある。

6. 実施後の参加学生の変化

今回、「わくわくほうせい！」に参加した学生は、山崎ゼミ生だけでなく、当日スタッフとして、経済学部その他ゼミ、他学部、他大学からであった。これらの参加した学生たちはこの企画の後、各々の生活の中で「わくわくほうせい！」のコンセプトの一つであった「身近なものに純粋に疑問を抱く」ことを念頭に置き、様々なことに率直な疑問を持ち、その解決につながる行動をとっている。また、園児を引き連れ班長として活動することで得たリーダーシップ、そして園児たちを一時的に預かることで自分の行動次第で、園児の大学や理科に対するイメージを変えてしまうことや、園児を危険に晒してしまうかもしれないという責任感を持つようになり、それを実生活で生かしている。

「わくわくほうせい！」は園児に理科の楽しさ、不思議さを教えるためだけの企画ではなく、参加する学生にもリーダーシップと責任感を持ち、積極的に世代間交流をとることができる実施する側もクライアント側にも両方に実施意義のある企画である。

年々、参加する学生の幅も広がり、学内外に広く活動を周ってきていることを実感している。

7. 今後の課題、展望と感想

これまで問題となっていた、企画運営を担ってきた4年生の卒業による引き継ぎをスムーズにするため、多くの資料をゼミナールで共有できるアーカイブ化することに成功した。従来同様に、ミーティング議事録や学生スタッフたちからのレポート、園児や引率の先生からのアンケートを元に、企画運営マニュアルを作成している。今後も、形式知と暗黙知を組み合わせ、スタッフ内で知恵や経験を共有する工夫が必要とされている。この改善点として毎年3年生が責任者を務め次の年に受け継ぐことができるようにした。

ゼミが一丸となって、大学生を主体として企画運営される「わくわくほうせい！」を、周辺地域の誰もが知る多摩キャンパスの名物イベントにし、法政大学を地域住民に開かれた、市民と大学との協働の器とすることを今後も目標としている。

今後は、さらに地域住民とのコミュニケーションやイベント運営などを通じて、学生たちが地域活動においてリーダーシップを発揮できるスキルを育成するだけにとどまらず、長期的には法政大学が地域住民にとってより魅力のある学び舎として認知されてゆくための役割を担ってきたい。

「わくわくほうせい！」を通じた企画、運営などのマネジメントの体験は大変貴重であり、今後就職活動や、社会人になってからも役に立つものと思われる。